

「人」が「人」を育てる —四国大会を終えて
四国個性化教育研究会 会長

長尾 順

今年、終戦から60年目の年になります。敗戦の焦土の中から立ち上がり、経済大国ともいわれるようになり、二度の石油危機やバブルの崩壊も乗り越え、世界屈指の豊かな国となりました。教育面においても戦時中の軍国主義的国家主義から一転して、民主主義的教育思想のもとに、新しい教育を展開してきました。そのなかで、個性を重視し、個人の特性に応じた教育も実践されるようになりました。

しかし、社会状況や文化環境の変化の中で、学校教育は学力向上対策や心の教育への対応等、多くの教育課題の取り組みに追われ、現場の先生方もとまどっています。戦後60年の中に歩んできた教育実践を見直し、将来を見据えて、教育の基本に立ち返り、原点を忘れないようにしなくてはなりません。

平成16年11月に、国では「甦れ、日本！」と題する教育改革案を発表し、「教育基本法の改正」「学力向上」「教育の質の向上」「現場主義」「義務教育法 国庫負担制度の改革」の5つの改革に取り組んでいます。中央教育審議会でも、義務教育の到達目標の明確化と制度の弾力化を図って、教育内容の改革を進めるために、中央教育審議会では、義務教育の制度改正、学習指導要領の見直し等を検討するようです。まさに教育改革の大きな波のうねりを感じさせられます。

最近特に言われ出した「ゆとり教育」批判や「学力低下」論に押されて、ともすればようやく軌道に乗り始めたかに見えた「多くの知識を教え込む」一斉学習からの転換によって「自ら考え自ら学ぶ力」を重要視した、一人ひとりの個性や能力を伸ばす教育が軽視されがちになったとすれば、きわめて残念なことです。こういう日本の教育の大きな節目のときに香川の地で、全国個性化教育研究連盟のご支援のもと、四国大会とも合わせた夏季研修会が持ったことは、本当に有意義なものでありました。

「より質の高い学びを創造する教師像の探究」という主題のもとに、全体会での講演、パネル、分科会とともに、充実した会となり、講師の先生方のご講演や参加された先生方の熱心な討議等、密度の高い会となり、大変感謝しております。同時に、こういう

熱意のある先生方が全国各地でいらっしゃるということに、心強い気がいたしました。

四国といいますが、首都を中心にした現代の文化の発信状況から考えると、海で隔てられた島国のような感覚でとらえられている方々も多いのですが、かつて航海によって文物の交流が重要な手段であった時代には、京都や大阪との交流が盛んでした。また、讃岐・阿波・土佐・伊予として、それぞれの各県で独特の文化や風俗が形成されてきましたことは歴史を見ても明らかなことです。

讃岐でも今は「讃岐うどん」が有名ですが、1300年前に弘法大師こと空海も、善通寺で誕生し、唐に渡って真言密教を学び、高野山を拠点に、真言宗を開いた方です。四国八十八カ所巡りは、大師の開かれた四国の寺々をお参りして、御遺徳をしのぶ旅は、現代人が心のやすらぎを求める今、クローズアップされてきています。四国の各所に見られる「接待」という行事は、巡礼者をもてなす心を伝えるものとして、今も残っています。そして、これらの寺々や遍路の途中での人との出会いが、人々の心をいつそうすがすがしいものにしていったのでした。

今、学校や教師に望まれていることは、「自信」と「活力」です。生き生きとした子どもを育てるためには、まず教師が活力と自信を持った生き方をしなければ、子どもはついてきません。

今回の研修会にあたって、これまでの日本映画の名作の中に登場する教師のえがかれ方をみました。そして、共通していることは、教師が子どもに愛情を持ち、教師が人間としても成長していることです。そして、その成長の源は、子どもを見つめ、子どものよさに学ぶことによって成長しています。教育という仕事は、人と人が関わり合うものであることを、改めて感じさせられました。特に現在は、保護者や地域住民の参加や協力も欠かせないものとなっています。そのためにも、教師は人とかかわる仕事であるということをお覚すべきでしょう。

本研修会では、全国の先生方の「熱い心」に出会えたことは、何よりのお土産でした。

ありがとうございました。

夏期研修会四国大会

個性を育てる

～より高い学びを創造する教師像の探究～

期日 平成17年7月30日(土)～31日(日)

会場 香川県綾歌郡宇多津町

ユープラザうたづ

日程

<7月30日>

基調講演 「個性を育てる」

全国個性化教育連盟会長 加藤 幸次

講演 「日本の映画に見られる教師像」

四国個性化教育研究会会長 長尾 順二

パネルディスカッション

「より高い学びを創造する教師像の探究」

パネラー

国立教育政策研究所 研究官 木岡 一明

横浜市教育委員会 指導主事 斉藤 一弥

坂出市立坂出中学校 校長 山田 知志

東浦町立片葩小学校 校長 成田 幸夫

コーディネーター

上智大学教授 奈須 正裕

<7月31日>

基調提案

「子どもと地域と学校カリキュラムづくり」

上智大学教授 奈須 正裕

講演 「今、求められている学力」

東京学芸大学教授 浅沼 茂

分科会

① 学校を創る

～学校が組織として働くためには～

コーディネーター

国立教育政策研究所 研究官 木岡 一明

② 少人数・習熟度別指導

～脱ドリル学習の展開～

コーディネーター

東京学芸大学教授 浅沼 茂

③ 総合的な学習

～教科との関連で期待されているものは何か？～

コーディネーター

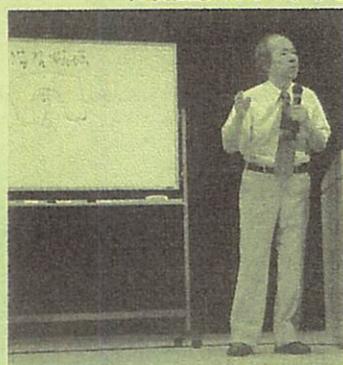
横浜市教育委員会 指導主事 斉藤 一弥

<7月30日>

基調講演 「個性を育てる」

名古屋女子大学教授

加藤 幸次



「個性」は1985年の臨教審で初めて出されたものではなく、1921年の新教育の指針の中に民主国家を進めるために「個性重視し、伸ばすこと」と

ある。個性は、これからは共通化と個性化のバランスの中で発展していく必要がある。

昭和の時代は、教育方法上の問題として個性を扱ってきた。したがって個に応じる指導を重視し、伝統的な授業でなく、できるだけ授業を個別化していった。平成の時代は内容の時代である。生活科や総合学習のように教える中身を教師が再構成・自主編成できる時代になった。このように考え、この会を「個別化教育連盟」から「個性化教育連盟」に変えた。学習では個別化と個性化はバランスを保って行う必要がある。現在は制度の時代になっている。義務教育制度について議論が行われているので、これからは制度上の個性化の問題についても注目する必要がある。

これまで個性を実態概念と方法概念で捉え個性の育ち方を見ようとしてきた。しかし、一人の子が経年的にどう変化してきたかを捉え切れていない。個性を育てるために学習パッケージやモジュール学習を復活させるなど、個性を育てる実践的どう引っぱっていくのが今後の課題となると、これまでの会の実践をまとめると共に今後の課題を話された。(文責 加藤 勇)

講演 「日本の映画に見られる教師像」

四国個性化教育研究会会長 長尾 順二

映画に登場する教師像から、人々の教育への願いが推測できるとパンフレットや編集された映画を基に、思い出とともに話された。



大正期の映画には、「情熱の詩人啄木」のように、自由主義思想を实践し村を追われるという例外的なものがあった。昭和初期は主人公の貧しい子どもを援助するという傍役で「路傍の石」や「綴方教室」に教師が登場する。昭和の戦時体制の中で良心的な教師が描かれる「みかえりの塔」があった。敗戦を契機に、民主主義教育の先導的実践者としての教師を主人公にした映画が創られる。「青い山脈」では理知的な女性教師、貧しい山村の子ども達と共に作文を通して生活の見直す「山びこ学校」の青年教師等である。昭和29年の「二十四の瞳」では一人ひとりの子どもの身の上を案じ、子どもとともに泣ける教師の姿であった。30年代には、仰ぎ見る教師像から人間として悩む教師像が描かれる。「人間の壁」の女教師は教師として生きることを問い直すことから自立していく人間である。50年代には、校内暴力・いじめ・不登校が社会的な問題となり教師としての在り方が問われ、「教職の碑」の殉死した校長や、正義感が強く行動的なテレビ番組の「金八先生」があった。平成時代の「学校」シリーズや「機関車先生」の教師は、子どもと同じ視点に立ち、子どもと向き合い、子どもからも学ぶことにより自分も人間として成長していく教師である。最後に「機関車先生」にあるように子どもたちに「ありがとう」といえる教師でありたいと結ばれた。(文責 加藤 勇)

パネルディスカッション

「より高い学びを創造する教師像の探究」

パネラー

国立教育政策研究所	研究官	木岡	一明
横浜市教育委員会	指導主事	斉藤	一弥
坂出市立坂出中学校	校長	山田	知志
東浦町立片葩小学校	校長	成田	幸夫
コーディネーター			

上智大学教授 教授 奈須 正裕



およそ3時間という長時間にわたり、上記のテーマに沿って、4人のパネラーが意見交換を行い、それぞれの考えを述べていただいた。

〈成田先生〉質の高い学び作りはいつの時代も求められているものであり、そういうときの教師集団作りのほんの少しの工夫とは、という問いから話を切り出された。その主張の核は、人間として生きる意味をともに学んでいくという、学びの質の変化を自信を持って、主張して欲しいということである。緒川小学校に始まるこれまでの先生自身の学校作りの経験を踏まえ、どのような手を打ったら子どもが変わったかという現場的な交流が必要であるということ。週プロや学習パッケージ・総合的な学習等の取り組みを経て、今改めて教科でも教科書によらない展開をどのように組織していくのか・単元作りの醍醐味というものを考えていきたいと強調されていた。

〈山田先生〉学校に指定研究として取り組んでいるキャリア教育を、特色ある学校作りの手段として、活用している実践を話された。具体的にはキャリア教育を学校全体の中心に位置づけ、教師のカリキュラムマネジメント力を活用し、子どもたちの学習意欲を育てていくことから始められたということである。職場体験学習や外部からキャリアアドバイザーを招聘することを通して、望ましい勤労観や職業観の育成に努めている。また、小・中・高の連携にも積極的に取り組まれ、開かれた学校作りを推進していると話されていた。

〈斉藤先生〉「授業を作る教師に求められるものとは」という言葉から話を切り出された。今なぜ質を問うのかというと、学びの質が低下しているからであり、どのように授業を作っていったらいいかが教師自身も見えていないのではないかと。教師にとって、子どもと素材と教師の三者の関係から導かれる授業・子どもが学ぶ授業作りの力・授業力が必要になってくると強調された。質の高い学びにしていくには、教師が単元のデザインにどれだけ関わることが重要であり、素材にどれだけ価値があるか見極め、そこからどういう子どもを育てるのかという分析が必要になる。更には子どもの様子を見取り、授業をコントロールしていくことが必要になってくる。このような視点で意識改革・授業改革するためには、スクールリーダーが必要になってくる。枠組みを作ってもこのような学びはできないがどのようにしていけばよいかと問いを残された。

〈木岡先生〉元気の出る組織マネジメントの考え方と教師像というテーマで話された。学校とは・組織マネジメントとは、という問いから話を始められた。教師集団と管理職には不幸なズレがあり、それを解消するには「学校」に原点をそろえ、教育機能・経営機能・教育目的の三つのベクトルに

向かって、それぞれ学校評価・授業評価システムの構築、授業、教育課程編成という領域の取り組みを行わなくてはならないと説明された。学校には多元性と多方向性の力が働いており、それがプラスの方向にうまく働くと、迅速な意志決定が行われ、多様なニーズに対応でき、柔軟な組織構造に変化し、ミドルリーダーの職能発達が図られると話された。

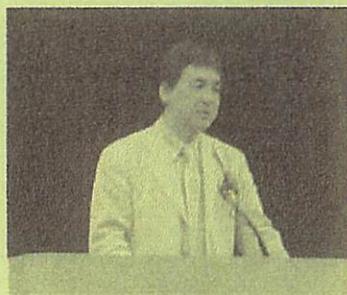
後半のパネルディスカッションでは、奈須先生の「茫漠とした不安をどう解決していけばよいか」という言葉で始まった。パネラーからは、本気で変わるといふ危機意識が必要である。それには連携する力・研究する力を持つこと、どんな子にしたいかと言い切る責任を持つことであり、そのためにはその子を育てていくストーリー＝教材を扱う意味をしっかりと見据えていくこと等の話が出された。学校の変革ということでは、職員全体で学習環境が変わることを共有することが必要であり、学校を元気にする働きかけはもっと大切にされていけばいいはずだという話が出された。それを受けて、教師や学校に自分事として責任を持たせ、一つの学校として閉じないように質的に高まるきっかけをどう作るかが大事であるということ、カリキュラム観と子ども・学力観を埋めていく努力が必要であるということも話題として出された。(文責 中田泰志)

<7月31日>

基調提案

「子どもと地域と学校カリキュラムづくり」

上智大学教授 奈須 正裕



いい授業とは何か。見分け方は個別の場面で、「何でこの活動をやっているのか」「この活動が終わってから何をやるの」と子どもに聞くと分かる。

今何で学習しているのか児童に明確になっている授業がよい授業である。このような授業を作るためには、問題解決学習をすることである。よく学ぶために興味・関心のあること、「したいこと」をやらせることである。この過程でぶつかるべき困難にぶつからせることが大切である。困難を解決する過程で学習が生まれるので、これを予想して学習を支援する。問題解決学習は時間がか

かるという意見があるが、知識とは何かを考え直す必要がある。わたしとの関係の中で知識は生まれるもののみ重要であり、知識の量の問題ではなく知識の質を変えていくと知識観を変え、学ぶことと生きることが不可分に結びつける必要がある。学ぶことと生きることが結びついた子の子どもの像は「丁寧な生き方のできる子」である。「丁寧な」を詳しくいうと一つは「誠実な子」である。自分・他者・物事に対して誠実であり、一つのことを多面的に見えることである。二つ目は「思慮深い人」である。人格と知識が一体化し、知っていることが行動・態度と一体化している人である。教科で思慮深い人を作り、生活科や総合学習などで誠実な人をつくる。このような子どもを育てるためには、教師は知識観を変え、子どもや知識への向かい方を丁寧にする。そして知識と対決することができる子どもを創ることであると話された。(文責 加藤 勇)

講演「今、求められている学力」

東京学芸大学教授 浅沼 茂



現在、教員に自信がなくなっているが、自信が得られキーワードは、「明るさ」「楽しさ」「因果関係が分かる力」であるとして話しを始められた。

学力低下論に関

係して、改訂学習指導要領で方法論を規定したり、歯止め規定があったりしていることや3割削減というのが計算をしてみると3割になっていない。授業時間数は35年前も世界では少なかったなどの不思議を指摘した。アメリカでは学力低下論が3度起きている。1回目は1917年のニューヨーク市長選で、新しい児童中心主義のゲーリー・スクールの教育と従来の一斉教育がよいか争点となる。選挙の結果一斉授業になった。教育は政治的である。2回目は「冷戦」を背景とする「スプートニック・ショック」である。「現代化」・教材の精選や教科の構造化などがおこなわれた。3回目はアメリカの産業が日本に負けるという経済的な背景とする「ジャパン・ショック」である。

「2000年に数学で1番になる」という目標を上げて改革を進めた。アメリカでは筋が明確であるが、今の日本の学力低下論の筋は不明確である。

OECDや の調査では読解力・因果関係をつかむ力が足りなくなっているとの結果が出た。この調査で1位のフィンランドは10年前に考

え方のプロセスを重視し、学力の中身を論理する力・組み立てる力・因果関係が分かる力などに変え、現場への権利委譲が行われた。因果関係を考えさせるものとしてデューイの「ろうそくの芯を作る」授業などがあると話された。

「明るさ」「楽しさ」を創る方法として2本のビデオを紹介した。子どもが分かったときの顔・納得することの重要性を「中学校数学の授業」で、学びを仕込む技として小学校での「ユーモア詩」の実践を話された。(文責 加藤 勇)

① 学校を創る

～学校が組織として働くためには～
コーディネーター
国立教育政策研究所統括研究官 木岡 一明

学校は未来を育む希望館

学校は地域と共に作る文化館

初めに、香川県・綾南町立滝宮小学校教務主任小谷 修先生からチーフティーチャー制を使い、学校組織を活性化してきた実践の紹介。



野市立駒林小学校長 五島由美子。

子どもたちが主人公を教育目標に年3回の授業研究・学校評価・子育てあったかネットづくりの3本柱で精力的に学校を元気にさせているのは高知県・高知市立一ツ橋小学校長 谷 智子が元気いっぱい提案した。新潟県と高知両県の女性管理職のパワーのすごさが残った。学校組織を活性化するための様々な手法が提案され、これを受けた形でコーディネーター役の国立教育政策研究所統括研究官の木岡一明先生のお話が続いた。

紙面の都合で印象に残った言葉を列挙してこの稿を終わりにしたい。「リーダーシップか、

リーダーシップか」「リーダーシップとはよさを上手に調整する能力」「子どもへの期待に充ちた風土」「教授活動に対する促進的な風土」「教職員間の批判的友人関係の構築」などである。

最後に、木岡先生が「元気の出る組織マネジメントの考え方を伝えたい」とおっしゃった。「組織マネジメント」という言葉の印象が変わる一言であった。(文責 松本光弘)

② 少人数・習熟度別指導

～脱ドリル学習の展開～
コーディネーター

東京学芸大学教授

浅沼 茂

「脱ドリル学習」をどう組むかについて、T・T、少人数・習熟度別とありとあらゆる手段をたてて日々子どもと向かい合っておられる先生方の姿に、「ていねいな手だては、教師にとっても、やりがいのある学習・生活作りになっていく」ことに改めて気づかされた。

提案1「学習のねらいに応じた学習形態の工夫」木谷直充・半山章人先生香川大学教育学部付属坂出中学校学習形態を3タイプに分けA一斉授業の中でのT・T、B小集団T・T思考重視教材、C習熟度課題別個に応じる目標テーブルをたて、自己評価カード始めわかりやすい学習プリントをもとに、苦手な子にも自分なりの考えをもてるように穴埋め問題・どこまでやるのか・質問の時間等工夫されていた。生きて働く学力を目指して、生徒に寄り添っている先生方の言葉に力強さを感じた。

提案2「一人一人の子どもたちの考えを大切にしたいきめ細かな算数少人数指導の在り方を求めて～「数学的な考え方」の育成を中心にして～」三谷秀樹先生丸亀市立飯山南小学校

「少人数指導とはどうあるべきか」「こだわりシート」計画表作りで見通す力をこどもにつけさせ・より良い学習をめざし課題設定の在り方(学



続いて「SHOW YOUR COLOR」や「フルスイング! 55」をスローガンに進化し続ける学校経営を紹介した新潟県・阿賀



習問題の提示の仕方}にたゆみない努力をされている三谷先生の機動力は「先生方に聞く」ことにある。もっとじっくりと授業参観をしながら一単元を子どものノートをまねに「こだわって」研修をしてきたいと思った。



提案3「数学的な考え方を育てる個に応じた指導の工夫」塚田英樹先生東京都大田区立小池小学校 多角形の亀吉くん・滑り落ちるフラッシュカードをはじめ、教室環境・教材開発・ノート工夫・掲

示計画・発表ボードなど、実際に手にとって触れたい。本時の展開のなかに「数学的な考え方を育てるポイント」「個に応じた指導のポイント」が詳しく記載されている。個々の子どもの何に応じた指導が必要であるか、それが適切であったかどうかを評価していくというスタンスがしっかりしているからだろう。

浅沼先生からは、個に応じるというのは、単にグループわけをしているかどうかではなく、一人ひとりの子どもが自分に合った課題意識をもっているということが大切という話をいただいた。



(文責 加藤久美子)

③ 総合的な学習

～教科との関連で期待されているものは何か？～

コーディネーター

横浜市教育委員会 指導主事 齊藤 一弥



提案1 岡山県・鴨方東小学校小川礼子は「鴨方歴史大作戦」での「高齢者と触れ合おう」を中心に発表された。子どもの問題解決場面を意図的に作る中で、必要観のある

教科の学びが生まれ、教科学習から総合学習へ広がり生まれたとまとめられた。

提案2 徳島県・穴喰小学校三浦知佳子先生は、地域にある「エ



ダミドリサンゴ」を調べ、自然再生会議や地域の人に発表した実践である。国語は学び方を学び、学び方ワークでインタビューの仕方などを学習した。児童は学ぶ楽しさ・おもしろさを知ったと報告された。

提案3 愛媛県・久米小学校竹縄浩二先生は国語・社会科学学習との関連を考えた「行こう！みかんかんつたい」の発表。生きた教材との出会



いにより追求力や創造的な実践力がついたらと報告された。



発表後「教科と関連させる意味は何か」「教科と関連する内容は何か」「教科と関連を図るということはどうことか・機能しているとはどういうことなのか」

「関連づけつつ、質の高い学びを作る教師に求められているものは何か」などの質問が齊藤先生から提案者に出された。教科との関連で期待されているものは何かと考えるだけでなく、子どもの学びから考えると、学びが広がっていくことが自然であり、学習のまとまりとしてひとまずまとめるものとして教科などを考えていきたい。そのためには育てたい子ども像の明確化が不可欠となる。これがないと学習の価値の連携は見えてこない。学びが教科等で区切られているということをも前提にするのではなく、学びの広がる動きを認めていく中で、子どもと学びを創っていくことを考える。そのときに子どもと共にカリキュラムを見直していく柔軟さがないと、無理に結びつけつけてしまう。総合的な学習だけでなく各教科等で身につける資質・能力を明確にすれば、一致することが具体的になるとまとめられた。(文責加藤 勇)

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒115-0031 東京都台東区千束4-29-2-1005
Tel&Fax 03-3871-8789 庶務部長 高瀬 雄二
e-mail:yujitaro@yahoo.co.jp
全個連ホームページ
<http://www.ns-da.com/aaa/zenkoren/index.html>

全国個性化教育研究連盟会報 第73号

平成17年9月10日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 加藤 勇